

田中親美透写古筆切「名葉集」の研究(3)

——前稿の訂正及び追稿——

小島 孝之

今回は、予定では透写『名葉集』の上巻部分をすべて終わ

らせつもりだったのであるが、私の個人的な事情により、前稿の続編を記すことが出来なくなりました。やむを得ず続稿を諦め、前稿の訂正及び修正を記すに止めたい。とはいえ、前稿発表後、たいへん多くの方々から、非常にありがたいご助言、ご意見、解説案等を頂戴することが出来、大幅な修正が必要となったので、それだけで一回を埋める位の分量になると考えられるので、途中寄り道も必要であると思ひ、以下、前稿で記載した写真を再掲して、修正について述べる。

(二) 50 「慈道親王筆往来物切」について

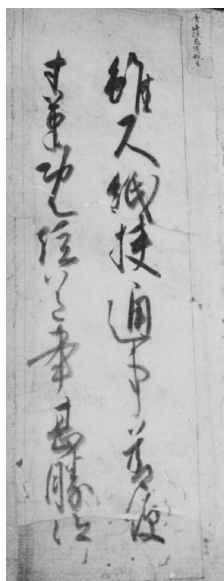


図1

この断簡について、前稿で「書状の一部と思われるが、実際の書状というより、往来物の一部なのではないかと思う。ただし、では何という往来物かという点、実は確認できてい

ない。」と記した。いわば探索放棄で、降参の白旗を掲げたのであった。

前稿で私は当該透写を、次のように翻刻した。

雖久紙挾通事□□

寸□免經道事甚勝位

私のこの翻刻に対して、さっそく細貝宗弘氏より、

雖尺紙挾通事善便

寸筆免短送書甚勝位

ではないか、とのご指摘を戴いた。確かに見直してみると、ご指摘の通りであると思われる。「尺」「筆」「短送」など明らかに私の誤読であり、弁解の余地のない誤りである。

その後ひよんなことから、この断簡の正体が判明した。実は、伝慈道親王筆『菅丞相(十二月)往来』の中の「七月状」の冒頭部分だったのである。

ちようど前稿が刊行されたころ、偶然に『ふくやま書道美術館所蔵品図録VI古筆手鑑』という図録を入手した。そういう図録が存在することに気が付いたのは比較的最近のことであつた。そこでこれをさっそく取り寄せたのだが、購入した後もしばらく積読状態であつた。気を取り直してこれを順繰りに見ていたところ、古筆手鑑『久澄』というものの中に、

64「伝青蓮院慈道親王筆『菅丞相往来八月返状切』」というものが載っており、ひと目で当該透写断簡のツレの断簡であると判った。さらに、同図録の解説を読むと、「島根美保神社蔵『手鑑』一六一が、唯一のツレとして確認される」とある。そこで美保神社蔵手鑑(古筆手鑑大成所収)を見直したところ、確かに美保神社蔵の断簡もツレと判断できた。「十二月状」の断簡であつた。

生憎、私の手許には『菅丞相往来』がない。ネットで探したところ、京都大学貴重書デジタルアーカイブに収められている版本『菅丞相往来』を読むことが出来ると判ったので、これを参照して、当該透写断簡の本文と比較してみた。すると、『久澄』所収の断簡と、美保神社蔵『手鑑』所収断簡とは版本『菅丞相往来』との間に本文の相違はないが、前稿に記した田中親美透写断簡は、版本『菅丞相往来』の本文との間に大きな相違が見られるのである。

版本の本文を見ると、

尺紙雖挾通事善便

寸筆既短送書髓媒仰

とあり、傍線部分が異なっている。なるほど、「免」より「既」の方が意味が通る。断簡の本文を見ると、「既」はどう

見ても「免」としか読めない。しかし崩し方が拙いとも考え得る。また、「使」は「便」とも「使」とも読めそうな書体で、これも崩し方の程度の問題かもしれない。どちらとも決めがたいようにも思うが、いずれも当方の解説を版本のように訂正したい。他方、冒頭の「尺紙雖」と「雖尺紙」では明らかに語順が違う。それでも、これもうっかりによる写し違いという可能性は排除しきれないが、末尾に位置する「甚勝位」と「慥媒仰」では誤写や誤読の可能性は考えにくいのではなからうか。ただし、「仰」は草書体の崩し方がうまくないと考えればそのまま通る版本『菅丞相往来』とは異なる本文を有する『菅丞相往来』の写本が存在したと考えるべきなのではなからうか。と言っても、他の『菅丞相往来』の伝本の内容を確認できないので、これ以上の探求は今のところ無理である。さらなるご教示を待つ以外にはない。

とりあえず、現在の時点での翻刻は次のようにならうか。

雖尺紙挾通事善使

寸筆既短送書甚勝仰

(二) 16 「後鳥羽院筆後鳥羽院宸記切」について

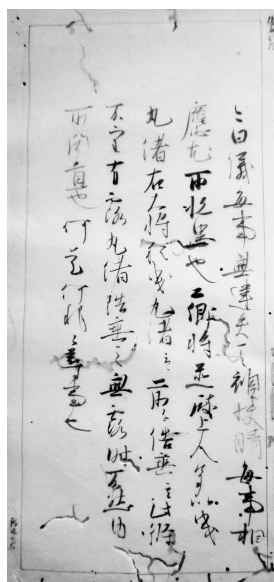


図2

この断簡の前稿訂正稿に、「丸緒」「浩垂」は何か儀礼に関わる装束に関する事ではないかと記したところ、後藤昭雄先生からさっそく、「丸緒」は『古事類苑』服飾部に「西三条装束抄」の「表帯」に「丸緒トモ云」と引かれていること、史料編纂所の「古記録データベース」を検索すると一例があること、「浩垂」ではなく、「結垂」であろう。「結垂垂れ(る)」という動詞ではないか、これも古記録に用例がある、という極めて重要なご教示を戴いた。

『古事類苑』は私も一応検索していたのであるが、調べ方が不十分だったので見落としていたらしい。また、ご教示に

従って「古記録データベース」で「有露」「無露」を検索したところ、「無露」の用例は見つからなかったが、「有露」については、関係のありそうな用例を幾つか見出した。『愚昧記』仁安二年閏五月九日条に、「上下皆有露・志部等」、「以細組二筋指付腰於袴、其末各同有露等」とあり、『中院一品記』の正長元年一〇月二日条に、「有露、今一筋者耳後引之、但、入小袖領中」とあるという。正確には分からないながら、いずれも装束あるいは紐に関係のありそうな文脈に登場しているということは分かった。

そうこうするうちに、松尾鞆江氏から、有職故実、就中、中世武具の専門家である近藤好和先生をご紹介いただいた。さっそく近藤先生にお尋ねしたところ、たちどころに図を添えた詳細な説明と解説文をお示しくださった。以下、近藤先生によるご説明を私流にまとめると以下の如くである。

近衛大将以下武官が、束帯で佩帯する儀仗用の矢を入れる容器である「平胡籬（ひらやなぎい）」に付ける緒紐に、丸打ちの組紐を使用することから、「丸緒」（表帯（うわおび）とも）と呼ばれるのである。騎馬の際などに動揺を防ぐために前緒で矢を搦め、後緒を腰にめぐらして前に結び垂らすのだそうである。だから「結垂」は「結び垂らす」でよいわけ

だ。さらに、この丸緒の両端に取り付ける水晶や金属の飾りを「露」と言うのだそうである。

近藤先生によると「露」のない緒というのは初見だそうである。「有露」の用例はあるが、「無露」の用例が見つからないのも道理であった。本例がいささかでも新しい知見を加えたのであれば、本稿の紹介にも意義があったことになり、嬉しい事である。

さて、右の情報に基づいて、かつ、近藤先生にお示し頂いた解説案を参考に、あらためて本文の翻刻と現代語訳を試みると次のようになるう。

（翻刻）

今日儀、毎事無遺失、天頗快晴、毎事相応、尤所悦思也。公卿將並殿上人多以曳丸緒。右大将猶曳丸緒云々。前に結垂云々。此条不審、有露丸緒結垂之、無露時不然。内所聞置也。何是非、可尋事也。

（読み下し）

今日の儀、毎事遺失無し。天頗る快晴。毎事相応す。尤も悦び思ふ所なり。公卿將並びに殿上人多く以つて丸緒を曳く。右大将猶丸緒を曳くと云々。前に結び垂らす

と云々。此の条不審なり。有露の丸緒は之を結び垂らす。無露の時は然らず。内に聞き置く所なり。何が是、何が非か、尋ねべき事なり。

(現代語訳)

今日の儀は、何事も遺失がなかった。天気は頗る快晴である。何事も相応しかった。何よりも嬉しく思うところである。公卿の将、並びに殿上人などの武官は多く平胡籬の丸緒を曳いた。右大将でさえも丸緒を曳いたという。

前に結び垂らしたということである。この事は不審である。露のある丸緒は前に結び垂らし、露のない時は結び垂らさないと、内々に聞いていたところである。何が正しく、何が間違いなのか、尋ねなければならない事である。

以上により、後鳥羽院が有職故実についても細かい事にまで気を配り、不審があればきちんと確かめようという探求心を持っていたことが窺われる。こうした態度を表明するのは帝王としてこうした儀礼に関わる経験がまだ少なかったことを表しているのではなからうか。実際には何時の出来事だったのであろうか。

(三) 23 「後宇多院筆松木切」について

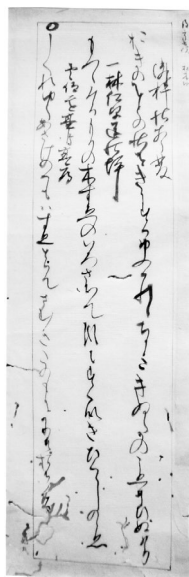


図3

この断簡の解説については、浅田徹氏、堀川貴司氏より非常に有益なご教示を賜った。

一首目の歌題を前稿で「櫛杵秋声発」としたが、正しくは「隣杵秋声発」であった。出典は『白氏文集』巻五の「早秋独夜」で、その第二句が「隣杵秋声発」である。浅田徹氏によれば、『俊光集』の三二八番歌に「隣杵秋声」の歌題があり、同時詠である可能性があるとのことである。『俊光集』は「松木切」とも深い関係があり、同座もしくは同機会での詠歌である可能性は少なくないと思う。

二首目の歌題の出典は『三体詩』である。巻二に収められる鄭谷の『江際』の第六句に、「一林黄葉送秋蟬」とある。この「黄葉」を「紅葉」に換えて引用したのである。ただ、

歌句についてはまだ不審が残っている。冒頭句は「きつ、みる」ではないかとのご意見もいただいたが、写真を可能な限り拡大して見ても、「も□□」の「も」だけは確実であり、替えられないと思う。また第三句の「いろさえて」は「いろまちて」ではないかとのご指摘も頂いたが、「さ□て」の「さ」と「て」は間違えようがないほど明瞭だと思ふ。まことに困ったことであるが、現状はここで行き詰っている。

三首目の歌題の出典も『三体詩』である。卷二、劉滄の『旅館書懷』の第五句に、「雲低遠塞鳴寒雁」とある。「雲は遠塞に低れて寒雁鳴く」と読むようである(手許には『三体詩』の抜粋本しかない)。国会図書館デジタルコレクション所収の本文を参照した)。堀川貴司氏によれば、筆者がもし後宇多院であるとすると、わが国の『三体詩』受容とすると早過ぎるように思われるという。「松木切」は筆者を「後宇多院」とするものが多いのは事実であるが、それが即、実際の筆者を示すということにはならないのが古筆切の極札の常套であることも周知の事実であろう。私は『三体詩』受容等その方面の知識がないので、確かなことは言えないのであるが、通説では、中巖円月が中国から帰国して以後、五山での『三体詩』の講義が始まったということで、日本での受容

はそれ以後というのがこれまでの通説であるらしい。しかしながら、「松木切」は伏見院を中心とする京極派の歌人たちのグループの作品であることは動かない。「松木切」の句題和歌の題に『三体詩』が用いられているならば、このグループ周辺では既に『三体詩』が受容されていたと考えるべきではなからうか。そうすると、これは極めて重要な事柄といふべきかもしれない。ぜひその方面の専門家にご検討をいただきたい。

さて、以上に基づいてあらためて翻刻を試みよう。

(翻刻)

隣杵秋声発

おきのをとの秋をきかするゆふくれにちかききぬたのこゑそひぬなり

一林紅葉送秋蟬

も□□みるもりの木すゑのいろさ^えて風^もすくなきひくらしのこゑ

雲低遠塞鳴寒鳥

○しくれゆくあさけのくもはすゑとちてさむきたのものにかりそおちける

まだ不完全ではあるが、ある程度、意味の通るように解説できたように思う。

さて、当該「松木切」の筆者についての検討は放置していた。「後宇多院」という極めが付属したか否かは透写からは分からない。ただ、透写の右肩に「後宇多院 松木切」という親美翁の書付があるばかりである。実際に現存する「松木切」の筆者に擬せられているのは、「後宇多院」とするものが多いのは事実であるが、他に「光厳院」、「伏見院」、「慶運」、「宗祇」などいろいろに分かれている。これまでの研究史を見れば、別府節子氏の『和歌と仮名のかたち』（平成二十六年五月、笠間書院刊）に収められる「第六章 「松木切」の考察」が基礎になる。同書には本論と補遺を合わせて十九点の「松木切」の写真図版が掲げられており、丁寧な分類も示されている。この十九点と当該透写とを比較すると、歌題の書き出しが二字程度下からという書式が一致する（他の「松木切」は五字程度下から）ことと、筆癖に共通点が見られることから、出光美術館蔵古筆手鑑『墨宝』所収の「松木切」、東京国立博物館蔵伝慶運筆「伏見院詠草」、個人蔵「未詳歌集切Ⅲ」の三点がツレである可能性が大きいと思う。

別府氏の研究によれば、『墨宝』所収切は伏見院の詠草で

ある。また、東京国立博物館蔵の伝慶運筆「伏見院詠草」は二八八首中四〇首が『伏見院御集』と一致することから、すべてが伏見院の詠と考えられる。さらに、個人蔵「未詳歌集切Ⅲ」の二首目が、伏見院の詠草である「広沢切」所収歌と詞も内容も近似することから、伏見院の詠草である可能性が高いと指摘されている。右の考察の本論部分には東博蔵「慶運詠草」は取り上げられていなかったが、「補遺」に取り上げられており、それらの考察の展開は多岐にわたり、ここでは文旨が煩雑になるので要約することは控える。直接ご著書を見ていただきたい。別府氏は東博蔵「慶運詠草」の筆者についても詳細な考察を展開されており、私にはそれ以上追加すべき事柄は何も持ち合わせていない。伏見院の真筆の可能性が高いとする別府氏の結論に同意するのみである。それに従い、本透写断簡の原本の筆者も伏見院であると考える。

(四) 95 「世尊寺伊行」古今集切(2)について

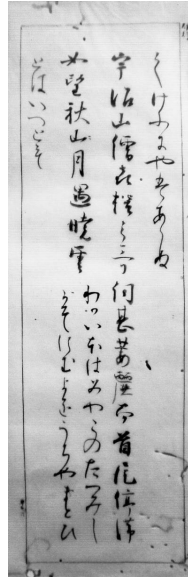


図4

浅田徹氏から、これは真名序に古注が付いたような形なの
で、『古今集』そのものの写本であれば、こういう形にはな
らない。したがってこれは、『古今序注』の断簡なのではな
いかというご指摘を戴いた。まったくその通りで、変わった
形式だと思ってしまったのが私のそもそもの間違いで、『古
今集序注』についての私の勉強不足を露呈しただけである。
私の完全な失考であり、恥じ入ってお詫び申し上げます。

(五) その他の訂正

その他にも不注意な誤りが多いので、以下に列挙する。

49 「熊野切」の翻刻六行目、末尾の文字「微」はおそらく
「微」であろう。原詩の「元微」に引きずられた誤読だと
思う。

87 「山田切」の翻刻、一行目と三行目の「必」の文字は
「如」の誤り。ケアレスマスである。

89 「龍山切」の翻刻、一行目の「導師」は「道師」の誤り。
パソコンの変換ミスの見落としてある。

91 「和漢朗詠集」の説明の一行目、「和漢朗詠集」下」の
「下」は「上」の誤り。単純なケアレスマス。

95 「古今集切」の翻刻、一行目冒頭の「の」は「し」の誤
り。校正の際の見落としてはあったが、上記の私の誤解が関
わっていると思う。

(追記)

今回このような形にならざるを得なかった事情を記したい。
用意した下書き原稿のデータを失ってしまったことによる
のである。本稿のために春から下書きを書き始めていたのだ
が、第一回の稿(1)に記し、第二回(2)でその後の情報

による訂正を行った三点の古筆切について、その後さらに多くのご指摘やご意見を賜ることが出来た。その結果、内容を大幅に書き直す必要が出来したのである。

そこで、先ず訂正箇所から書き始め、それが済んだ後に、第二稿の続編を執筆した。粗稿を書き終えた時点でこれをひとまず保存した。その後は、しばらく別の仕事に集中して本原稿については頭から離れていたのであるが、そろそろ締め切りまで残り二か月という時点で本稿を完成させなければならぬと思い、再び保存データから下書き原稿を読みだそうとしたところ、どこにも存在しないという恐ろしい事実を突きつけられることになった。

私は完全にパニックに陥った。何故だ？どうしてだ？と思考はぐるぐる空回りするばかり。いったい何が起ったのだろう。老耄のゆえに保存した場所を忘れるという現象は珍しいことではない。そこですべてのメモリーを二回、三回と、全部開いてみたのだが、ないものはない。データを記録した時には、何度か再読出しをして、ちゃんと保存されていることを確かめたはずであった。それが消えるとは一体どういうことか？

この間にあったことをとつおいつ思い出してみた。そうし

て一つの可能性に思い至った。それはウインドウズのクラウドである。一昨年ごろからだったか、しばしばクラウドを利用せよというメッセージが画面を邪魔するように飛び出してくるようになった。どこにいても、別のパソコンからでも記憶させたデータにアクセスできると宣伝する。あまり頻繁に登場するし、私は二か所の自宅を一か月置きに行き来するような生活をしているので、使えるかもしれないも思つて、このうるさい宣伝を止めさせるためにクラウドを無料で利用するという選択をした。実際には、データを記憶させたフラッシュメモリーを携帯するので、クラウドに頼る方法は取っていないかった。ところが、数か月後の昨年に入ってから、無料で利用できるデータ量の限界に達したので有料サービスに移行せよというメッセージが頻繁に画面に現れ、実際に作業を保存しようとするときできないという事が起こった。甚だ迷惑に思い、これを止めたいと考えて、PCの専門店に相談に持ち込んだところ、止めることは可能だが、完全に削除してしまうと、パソコンの動作がおかしくなる可能性があるという。ある程度の宣伝画面の出現は我慢して、今現在クラウドに送られているデータを削除して、以後データをクラウドに送信しないようにすればよい、というアドバイスを受け

た。その時、クラウドに必要なデータがないか確認を求められたのだが、私としてはクラウドを利用した覚えはないので、必要なデータはすべてフラッシュメモリーに保存してあると答え、クラウドが作動しなくなるようにしてもらったのであった。

あの時、本稿の下書きのデータがクラウドにしか保存されていないかつすれば、その時消してしまったに違いない。フラッシュメモリーに記録したつもりでいたが、実はPCがクラウドにだけ保存していたのかもしれない。確認不足だったが、後の祭りである。

何ということだろう。知らないうちに自分でデータを消してしまったということか。自らの不甲斐なさに泣けてくる。

そもそも、前稿は私の個人的な事情（二箇所住居を不定期で往来し、一定期間居住し続けている）から、校正の時期に不在というようなこともあり、十分な校正が出来なかった。前稿では移動と重なり、再校にかけられる時間が一日しかなく、大急ぎで目を通して、翌日、羽田空港の郵便ポストから投函するという無茶なこともした。誤植も少数しか見つけられなかった。自分の初校を信じ過ぎていた。

念校の段階で編集担当者から、数ヶ所について、これは訂

正を要するのではないかと連絡を頂いたにもかかわらず、右のような事情によって連絡を受け取ることが出来なかった。私からの返信のないまま、編集担当者の判断で誤植、誤読箇所を訂正してくださった。今回訂正した箇所もすべて、編集担当者から問い合わせのあった箇所であり、私からの返信がないため担当者は私の何らかの意図による箇所であろうかとの親切なご判断で、訂正せずに残されたものである。本来であれば、これらの箇所も編集担当者のご指摘どおり訂正すべき箇所であったのだ。編集担当者に対して、ご指摘を活かせなかったことを心からお詫び申し上げるとともに、深く感謝申し上げます。

本稿は、右のような事情を踏まえ、ミスのない原稿を用意する心算だったところが、原稿紛失という体たらくで、またまた失敗を繰り返すことになってしまった。返す返す、老耄の致すところと恥じ入っている。

（こじま・たかゆき 成城大学名誉教授）